

ドア・インザ・フェイスの限界

「ねえママ、どうしてもダメ？」

不満を音にしたような問いかけは、何度も繰り返されたものだった。

「ダメなのはダメ」

「こんなに頼んでるのに？」

揺れた声の湿度が上がる。泣き落とすつもりなのだろうが、ひとたび領いてしまえば、泣きすぎて涙が涸れるような事態を引き起こしかねない。

「ジムチャレンジのすいせんじょうもカンムリパスも、誕生日プレゼントにはできないの。危険な場所だってことは、あんたの方がよく知ってるでしょう？」

「じゃあ、ヨロイパスならいいの？」

ああ言えばこう言う。八歳の誕生日を翌月に控え、息子は口が立つようになったが、今は成長を喜ぶ気になれなかった。

「でも、ダキョウはダメだ。カセキポケモンが生きて動いているところは、カンムリ雪原でないと見られないから、プレゼントはカンムリパスがいい！」

「それがダメだって言ってるの！」

カンムリ雪原は危険だから、行かせられない。それだ

けのことが、息子には通じない。災害や事故が発生するたびにニュースで報じられ、ジムチャレンジを夢見る子どもにも危険性が知れ渡っているワイルドエリアとは違い、カンムリ雪原はテレビカメラが入ることも困難な場所なのだ。

「ママは危ないからダメなんて言うけど、マラカッチが一緒なら大丈夫だって」

同意を求められたマラカッチが、気まずそうに目をそらした。家事を手伝ってくれるポケモンのほうが、息子よりも話を通じる気がする。

「止めておきなさい。マラカッチを寒い場所に連れて行くなんて」

くさタイプのポケモンは、こおりの技に弱い。タイプ相性の知識が、マラカッチと私を救ったかに思えた。

「だったら、寒くて冷たい場所が平気なポケモンを仲間にする！」

「その計画は、大人になってから立てましょうね」

私は立ち上がり、実りのない会話を打ち切った。

「ダンデに頼めば、どうにかならないかな」

私は肩をすくめた。ポケモンリーグの委員長に、子どもたちが一斉にカンムリパスの発行を訴えれば、業務が滞ることは間違いない。

チャンピオンを退いたダンデが、リーグ委員長とバトルタワーのオーナーを両立させているのは、スタッフが

優秀であることに加えて、彼自身が成長を続けているからだ。

強いポケモントレーナーには、学びが必要。

幼いチャンピオンの声と眼差しは力強く、大人に強いられた発言ではないことは確かだった。ホームスクーリングや家庭教師の力を借りて学業を修めた彼の活躍に、教育熱心な保護者を想像したものである。

家族の力だけではなかったことを示したのが、ダンデの弟であるホップの存在だ。ガラルスタートーナメントで活躍する一方で、彼はポケモン博士を目指して勉学に勤しんでいる。兄弟は幼いころからブラッシータウンの研究所に出入りして、マグノリア博士の教えを受けたそうだ。良き指導者との出会いは、一生の宝である。

カセキに夢中の息子が師と仰いでいるのは、6番道路のウカツだ。怪しげな機械を使った怪しげな実験のイメージが漂うもの、学問の世界では業績を上げているらしく、優れた研究者であることは間違いない。

だが残念なことに、彼女は研究のためならば、危険を顧みないタイプだった。静かに笑いながら、両手で息子の背中を押す姿が想像できる。できてしまう。

「ヘイ、ロトム。ラジオをつけて」

「任せるロト！」

私はスマホロトムに声をかけた。家事のお供にテレビや動画を流す人は多いが、私の場合はラジオだった。

「来週の子どもポケモン電話相談は、カンムリ雪原スベシャル！ 皆さんからの質問をお待ちしています」

おなじみのテーマソングとともに流れてきたのは、さまざまなポケモンの専門家が子どもの質問に答える番組の宣伝だった。カンムリパスの取得条件緩和とガラルスタートーナメントの開催によってカンムリ雪原が注目されていることを、番組のスタッフは知っているようだ。

「ねえ、ダンデ出ると思う？」

「誰が出るにしても、あんたにカンムリパスを贈る流れにはならないと思うわよ」

口を尖らせた息子を、マラカッチが陽気なリズムで慰めた。

まだ八歳なのか、もう八歳なのか。どちらにせよ、私は息子の行動力を甘く見ていた。キッズ用スマホロトムが着信を告げたのは、カンムリパスの話題が忘れ去られかけた、とあるティータイムのことである。

「明日の子どもポケモン電話相談の件で、ご連絡をいたしました。近くに、大人の方はいらっしゃいますか？」
興奮と驚きに目を見開いた息子の表情に微笑まじさを感じながら、私はスマホロトムに返事をした。息子の質問が、番組に採用されたのだという。

「あんた、どんな質問したの？」

スタッフの説明を聞き終えた私は、自分が番組に出演するわけでもないのに、ひどく緊張していることに気が

ついた。湿った掌をナプキンで拭う。

「明日になってからのお楽しみ！」

カンムリ雪原スペシャルには、ポケモンリーグの委員長ダンデが回答者として出演するのだ。元チャンピオンと電話で話ができるかもしれないという期待に、息子が目を輝かせるのは当然だろう。

「ああ！ 早く明日にならないかな」

ダンデの名前を繰り返す息子目の目に、もはやテーブルの菓子は映っていないらしい。私はチョココレートの包み紙をはがしながら、スマホをのぞき込んだ。

「ダンデだけじゃなくて、明日はジ・アイスとソニア博士も出るんだね」

子どもポケモン電話相談の公式サイトには、番組のスケジュールと一緒に、出演者の名前と写真が表示されていた。明日はポケモンリーグの委員長に加えて、こおりジムのリーダーと知識豊富なポケモン博士が、雪と氷に覆われたカンムリ雪原に関する質問に答えてくれるらしい。

「ソニア博士も？」

勢いよく、息子がソファから体を起こした。焦りしか表現できないものが、目元に漂っている。

「大変だ！ のんびりしてるヒマはない！」

洗面所に駆けこむ背中を、マラカッチがリズムカルな音を立てて追いかけた。

カンムリ雪原スペシャル当日、息子はウオノラゴンが前面に大きくプリントされたシャツを着てリビングに現れた。撫でつけられた髪からは、付けすぎたワックスの匂いが漂っている。

「気合入ってるわね。普段もその半分ぐらい、身だしなみに気を遣ってくればいいんだけど」

男子と女子とでは、ファッションに求める要素がかけ離れていることも、電話で進行するラジオ番組では相手の姿が見えないことも、私は口にできなかった。息子の意欲を、事実を指摘して潰す必要はない。

緊張のせいかな、それとも身なりを整えさせた男心の影響か、息子は神妙な顔で黙りこんでいた。軽快なテーマソングで始まった番組は、スムーズに進んでいく。

「次は、ラテラルタウンのお友だちの質問です」

司会の女性アナウンサーの声は優しく、落ち着いていた。息子を応援するかのように、マラカッチが短く音を鳴らす。

「僕はカンムリパスが欲しいのですが、危ないからダメだと言われています。どうすればカンムリパスが手に入るのかと、カンムリ雪原がどれぐらい危ないのか知りたいです」

眉間のあたりで黒い渦が巻き、全身の力が抜けた。カムリパスをめぐる親子のやりとりを、息子はガラル全土に持ち出したのである。

「カムリパスが欲しいのね」

息子の返事を聞いてから、アナウンサーは質問を重ねた。

「危ないからダメって、誰に言われてるの？」

「ママ」

息子が私から目をそらしたのは、気のせいだろうか。

「カムリパスはどうやったら手に入るか、そしてカムリ雪原はどれぐらい危ないのか。この質問には、ダンデ先生に答えていただきますよう！」

「おはよう」

「おはようございます！」

息子が挨拶を返せたことに、私は心から安堵した。カムリパスを欲しがる子どもたちが、息子に注目しているのだと考えると、緊張で胸が痛む。

「まずは、キミがカムリ雪原でやりたいことを教えてくれ」

「カセキポケモンが見たいです！」

「そうなのか。好きなカセキポケモンは？」

「一番はウオノラゴン！ ガチゴラスも好きです」

スピーカーの向こうで、ダンデが優しく笑ったような気がした。

「カムリ雪原にはカセキポケモンのほかに、色々な野生のポケモンが暮らしている。そういったポケモン目当てでカムリパスを欲しがる人は、たくさんいるんだが、実際に発行されたパスの枚数は少ない。どうしてだと思う？」

お気に入りのポケモンを尋ねたときとは、声のトーンが違う。ダンデは単なる好青年ではなく、ガラル地方のポケモントレーナーをまとめ上げる巨大な組織のトップであった。

「……危ないから？」

「そうだ。どれぐらい危ないのかを説明する前に、カムリパスをもらえる人について話そう」

返事とともに、息子が期待の息をついた。

「まずはカムリ雪原の出身者。もし、キミの周りにフリーズ村から来たっていう大人がいれば、頼めば里帰りに連れていってもらえるかもしれない」

「そんな人、いません」

ナックルシティ出身の私に視線を送り、息子は肩を落とした。

「そうか。だったら、キミが遠くで暮らしている家族や親戚と会う場合のことを考えてみよう。遊びに行くにしても、家に来てもらうにしても、特別な許可やパスは必要だろうか？」

「いらなと思います」

「そうだろう。カンムリ雪原は、家族に会いに行くにも許可が必要な場所だってことを、覚えておいてほしい」
里帰りが死出の旅になりかねないカンムリ雪原の危険性を、ダンデの言葉から感じ取ったのか、息子は素直に頷いた。

「そんな場所だから、カンムリ雪原に住む人は減っているんだが、大人の場合は仕事でカンムリ雪原に行くことがある。仕事の内容にもよるが、そういった人は、比較的可カンムリパスが手に入りやすいな」

「例えば、どういった仕事でしょうか？」
すかさずアナウンサーが問いかけた。

「とくに多いのは、空飛ぶタクシーの運転手や、鉄道のスタッフだな。こういった人たちは、会社がカンムリパスの手続をしてくれる」

「そうなんだ」

番組が終わるころには、空飛ぶタクシーのドライバーや電車の運転士を目指す子どもが増えるのではないだろうか。

「カンムリ雪原は分からないことだらけだから、行ってみたって研究者も多い。ここにいるソニア先生も、ついこの間までカンムリ雪原で調査してたんだぜ」

「ソニア先生、そうなんですか？」

フットボールのリーグ並みの鋭いパスが繰り返されるのが、この番組の特徴である。私は先生たちの顔

ぶれを思い浮かべながら、言葉の続きを待った。

「おはよう、ソニアです」

名前を呼ばれた息子が背筋を伸ばした。挨拶が口の中で弾け、声になる前に消える。私は見ないふりをした。

「ポケモンの調査のために、カンムリ雪原に行ったのは本当よ。詳しいことはまだ話せないけど」

「カセキポケモンに興味があるなら、研究者になるのはどうだ？ キミが大人になっても、カンムリ雪原には調べることがたくさんあると思うぞ」

カンムリパスの入手方法を尋ねただけなのに、まさか将来の職業を示されるとは想像もしていなかったのだろう。息子はしばし考えこむ素振りを見せた。

「スクールのレポートじゃダメですか？」

「うーん」

無理を言って先生を困らせない。私は顔をしかめて息子を睨んだ。

「そのレポートが、大学や企業と共同研究するような内容としても、まだスクールに通ってる子にカンムリパスを用意するのは難しいだろうな」

「カンムリ雪原には、大人が行けばいいって言われるだろうね」

「そっかあ……」

落胆する息子の顔を、マラカッチが心配そうにのぞき込んだ。

「ダンデ先生、最近、ルールが変わって、カンムリパスが手に入りやすくなったと聞きましたか？」

「そうなんだ。今から教える方法なら、大人にならなくてもカンムリパスが手に入るぜ！」

「どうすればいいの？」

息子の質問は、番組を聞いている全てのリスナーを代表したものだった。映像を使わないラジオでも、ダンデは人々の興味を引く方法を知っている。

「ポケモントレーナーになって、ジムチャレンジを目指せばいい。ジムチャレンジャーは、子どもでもワイルドエリアに入れるのは知ってるだろう？ ポケモンリーグの規則が変わったおかげで、ジムチャレンジャーはカンムリ雪原にも行けるようになったんだ」

雲の上ならぬバトルタワーの上の話である。ダンデの声と息子の表情は明るかったが、私は彼らほど樂觀的にはなれなかった。

「大人になるまで待てないなら、ジムチャレンジャーになってカンムリパスをもらうっていう方法だけど、できそうかな？」

「がんばれば、どうにかなるかも」

各地のジムリーダーのもとに、ジムチャレンジの推奨状を求める子どもが殺到する光景を想像して、私は首を振った。仮面の下でオニオンくんがうろたえている。

「だが、さっきも言ったようにカンムリ雪原は危険な場

所だ。もし、ジムチャレンジしたときにカンムリパスがもらえていたら、オレは遭難してチャンピオンにはなれなかったかもしれない」

方向音痴が知られている人間の言葉には、恐ろしいほどの説得力があった。

「ここにいるソニア先生も、二次遭難してたと思う」

「そうしたら、ポケモン博士にはなれなかったかもね」私は二人がジムチャレンジに参加した当時のポケモンリーグ委員会に、心から感謝した。二人に万が一のことがあれば、ガラルの損失である。

「ワイルドエリアではポケモンリーグのスタッフがパトロールしているし、トレーナーの出入りが多いから、もし強いポケモンに出くわしても、すぐに誰かが助けに行けるが、カンムリ雪原は人が少ないからそうはいかないんだ。それに、近くにポケモンセンターもない」

「ええ……」

あつて当たり前のものがない。息子はカンムリ雪原の危険性を、おぼろげながら感じ取ったようだ。

「そんなところにジムチャレンジャーを送りこんでところで、遭難するか野生のポケモンのエサになるだけなんじゃないかという意見もあるが、このルール改定の目的は、ワイルドエリア以上に厳しい環境に身を置くことで強くなってもらうことなんだぜ」

「相手の力を見極める判断力や、必要ならば引き返す決

断力が求められるということでしょうか？」

「そういうことだな」

アナウンサーが上手く話をまとめた。

「カムリ雪原で生き抜くための強さの目安のようなものはありますか？」

「少なくとも、ドラゴンバッジを手に入れるぐらいの實力があれば、カムリ雪原のポケモンと正面から渡り合えると思うぜ！」

ドラゴンバッジを手に入れて、セミファイナルトーナメントの参加資格を得るジムチャレンジャーは、ごく一握りだけだ。息子は遠回しに、カムリパスの獲得を諦めるように説得されているのかもしれない。

「ドラゴンバッジですって。ジムチャレンジで、バッジを全部集めれば、カムリ雪原でカセキポケモンに会えるかも！」

目標が具体的に示されたことを喜べばいいのか、その難易度に頭を抱えればいいのか。マラカッチが息子の隣で首を振った。

「ソニア先生は、ドラゴンバッジ持ってるんですか？」

「ああ、持ってるぜ」

ソニア博士本人ではなく、息子問いに答えたのはダンドだった。

「彼女がバッジをもらった瞬間にオレも居合わせたから間違いない。最後はラプラスが決めたんだ」

「よく覚えてる」

感嘆の声は、アナウンサーのものだったかもしれないし、二人のジムチャレンジを知る「ジ・アイス」のものだったのかもしれない。

「研究者やカムリ雪原の出身者は、バッジを持っていなくてもカムリパスを用意してもらえりけど、ポケモンを捕まえたいとか、研究したいとか考えてるんだっただら、バッジは一つでも多く持ってたほうがいいわね」

ソニア博士はよく考えた上でアドバイスをくれたのだろうが、まるで参考にはならなかった。

「それはちよつと、難しいと思う……」

打ちのめされたような声が、息子の口から漏れた。

「難しいと思ったのは、自分の能力をきちんと見極めた証拠だな。いい判断だ」

子どもポケモン電話相談では、出演者が子どもの発想や言葉拾い上げて賞賛する。ダンドにほめられた息子の両目が、一瞬にして元氣を取り戻した。

「いま七歳だよね？ ジムチャレンジを目指すにしても研究の道に進むにしても、学んで、遊んで、ポケモンと触れ合ってから、ゆっくり考えればいいんじゃない？」

「はい！」

頷いた息子の頬は赤かった。

「カムリパスを手に入れる方法と、カムリ雪原がどれだけ危ないか、分かったかな？」

「はい、とても！」

アナウンサーに答えるに声は力強い。ごく短い時間に息子がめざましい成長を遂げたように思えるのは、親の鼻根目だろうか。

「他に何か、質問はある？」

「ダンデみたいに、強いけど方向音痴のトレーナーがカムリ雪原に行けばどうなりますか？」

「何言ってるの？」

息子を窘める私の声は、高性能なスマホロトムに拾われたばかりか、スタジオから電波を通じてガラル地方全土に拡散されてしまった。ママ友に聞かれていなければいいのだが。

「他の人のことは分からないが、オレならば間違いない迷子になるだろうな！」

なぜかダンデの声には、自信すら漂っていた。

「大丈夫なの？」

「遭難やケガなら、心配ないぜ。オレのリザードンは道を覚えるのが得意なんだ」

ときおりSNSに書きこまれる、リザードンがダンデの道案内をしていたという目撃情報は、おおむね事実のようだ。

「先生のリザードンはすごいですからね。今朝もダンデ先生をスタジオまで送り届けてくれました」

「すごい！」

ダンデのリザードンは、シュートシティの地理を理解しているということだ。その賢さや健気さは立派だと思いが、残念なことにリスナーの参考にはならない。

「オレとリザードンのように、トレーナーとポケモンがお互いを信じ、力を合わせれば、カムリ雪原のような危険な場所でも乗り越えられるはずだ」

「信じて、力を合わせる……」

息子の視線を受けて、マラカッチの両手が軽やかな音を立てた。決して遠くはない未来に、一人と一体は私のもとを旅立つのだろう。

「ありがとうございました！」

「また聞きたいことがあったら質問してね」

晴れやかな面持ちで、息子は通話を終えた。大役を果たしたスマホロトムも誇らしげに見える。

「オレも、カムリ雪原に行きたいぜ」

「さっきの質問じゃないですけど、一歩間違えれば大変なことになりそうですね」

アナウンサーの言葉に大きく頷いたのは、きっと私たち親子だけではないだろう。ガラル地方の人々の心をいともたやすく一つにまとめ上げられるのが、ダンデという人物の素晴らしくも恐ろしいところだ。

「もちろん、オレだって無謀な真似はしないぜ。カムリ雪原に詳しい人と、一緒に行くももうつもりだ」

一人よりも、二人。ガラルスタートーナメントでは力

強く聞こえる言葉が、なぜかラジオでは虚しく響く。

「……ソニア先生が、ものすごい勢いで首を振っている。横に」

アナウンサーの説明に「ジ・アイス」の軽やかな笑い声が弾けた。

「ダンデってさ……ソニア先生と仲いいよね」

「幼馴染だからね」

ジムチャレンジという命がけの冒険を乗り越えた二人である。幼馴染や友人という言葉では説明できない強い結びつきがあっても、不思議ではないだろう。

「そうか、そうかあ……」

息子のため息は長かった。世の中には、懸命に手を伸ばしても届かないものがある。突きつけられた現実を前に感情との折り合いをつけ、次の行動を考えるのが人生なのだ。

カムリパスは用意できないが、せめて大好きなカセキを。私の依頼に応えたスマホロトムは、ナックルユニバーシティが主催するカセキ発掘体験ツアーの申し込みページにアクセスした。

「火山の火口や深い海の底のような、人間には行けない場所のポケモンを調査するために、二十年ぐらい前から

自動運転式の乗り物が開発されているの。その乗り物のおかげで、レンティル地方では自然を壊さず、ポケモンを傷つけずに、安全に調査ができたんだって」

買い物から戻った私の耳に、ソニア博士の優しい声流れ込んでくる。研究者の好奇心は、たやすく国境を越えるようだ。

「その乗り物、ワイルドエリアやカムリ雪原でも使えませんか？」

「レンティル地方じゃなくて、ガラル地方の環境に対応できる乗り物を開発して、ワイルドエリアやカムリ雪原に乗り入れるためのルールを決めれば、何年か先に使えるようになるかも。そんな乗り物ができたらスゴイだろうね。キミが開発してみる？」

まんざらでもない質問者の声に、けたたましい足音が重なった。

「ママ！」

息子の後ろをスマホロトムが追いかけてくる。部屋に戻って、ラジオの続きを聞いていたのだろう。次の台詞を予想して、私は身構えた。

「レンティル地方だって！ ガチゴラスやアマルガがいるんだって！ 僕もかっこいい乗り物でポケモンの調査したい！」

ドア・インザ・フェイスという心理学のテクニクを思い出す。最初に大きな要求を突きつけて断らせること

で、二度目の要求、最初のものよりも小さい本命のものを受け入れてもらうという交渉術は、人間の罪悪感を巧みに利用したものだ。だが、物事には限界がある。

「外国に連れて行けとか、無理言わないで……」

子どもの好奇心と探究心を守り育てるのが、大人の役割とはいえ、決して万能なわけではない。大きくため息をついた私の側で、マラカッチが軽快に腕を振った。